第六卷 天界 大正十五年 六月號

第六十五號

時の記念日

六月十日は、毎年それを「時」の記念日として迎えることが數年來、わが國の社會一般に行はれるやうになつた。良い行事である。——殊に我が國に於ては。

しかし、「時」の記念日を決して御祭り騒ぎで終らせたく無いものである。よろしく之れを純天文學的の記念日として、先づ「時」の根本知識を養ひ、「時」の制度を敎へ、「時」に對する人間の義務と態度とを覺らしめ、「時」の歷史を味はしめ、「時」と人生、「時」と宇宙のもろもろの關係を求めしめ、從つて、「時」の權威と時の價値とを認めしめなければならない。

たゞ其の日の一日だけ街頭の賑はしに、「時を守れ」、「時計を正しくせよ」と叫んで、徒らに「時は人世の約束に非ずや」と反問せしめる愚に出でてはならない。約束は正に約束なりと雖も、そは實に大宇宙と人生との間の約束である。故に「時」の權威は宇宙と共に高く、「時」の價値は天體と共に永遠である。「時」に於いて純天文學が人世と最も深い交渉を有つ。天文を愛する人は「時」をも愛する人でなければならない。「時」の意義を宣傳する結局は、總ての人を多少の天文家に養成するまでといふ意氣が無くては成るまい。

「時」の記念日は、又、「天文學」の記念日であらせたい。そして此の日、「時」の進行する實況を敎ふるために、星々と其の運動を敎へるが好い。此の日至るところに天文講話會が開かれ、大小の天文家は悉く街頭に出でて、社會への御奉公に、「時」の敎育をすべきであらう。

星を知り、「時」を尊ぶ人は、僞りを惡み、正しきを愛する人であるに違ひない。此の種の人が今の世に最も要求される。天文學の普及は世を正義に導びく道の一つである。「時」の記念日は正義の世への一里塚でなくてはならない。

(山本)